雪氣

〔頼政卿集冬〕待初雪

またれつる雪げかと社思ひつれいまだ時雨の雲にぞ有ける

〔夫木和歌抄十八雪〕百首御歌　後一條入道關白

はれくもりふりもつゞかぬ雪雲のあふさきるさに月ぞさえたる

〔北越雪譜初編上〕雪意（ゆきもよひ）　我國〇越後の雪意は暖國に均しからず、およそ九月の半より霜を置て、寒氣次第に烈く、九月の末に至ば、殺風肌を侵て冬枯の諸木葉を落し、天色霎（せうゝ）として、日の光を看ざる事連日、是雪の意也、天氣朦朧たる事數日にして、遠近の高山に白を點じて雪を觀せしむ、これを里言に嶽廻といふ、又海ある所は海鳴り、山ふかき處は山なる、遠雷の如し、これを里言に胴鳴りといふ、これを見これを聞て、雪の遠からざるを知る、年の寒暖につれて、時日はさだかならねど、たけまはり、どうなりは、秋の彼岸前後にあり、毎年かくのごとし、

雪の用意　前にいへるがごとく、雪降んとするを量り、雪に損ぜられぬ爲に、屋上に修造を加へ、梁柱廂（家の前の屋翼（さし）を里言にかといふ、すなはち廊架なり）、其外すべて居室に係る所力弱はこれを補ふ、雪に潰れざる爲也、庭樹は大小に隨ひ、枝の曲べきはまげて縛束、椙丸太又は竹を添へ杖となして、枝を强からしむ、雪折をいとへば也、冬草の類は菰筵を以覆ひ包む、井戸は小屋を懸、厠は雪中其物を荷ふべき備をなす、雪中には一點の野菜もなければ、家内の人數に応たがひて、雪中の食料を貯ふ、あたかなるやうに土中にうづめ、又はわらにつゝみ、桶に入れてこほらざらしむ、其外雪の用意に種々の造作をなす事、筆に盡しがたし、

初雪

〔後水尾院當時年中行事下〕一初雪つもれば御盃はじまる、べたゝのかちんにて一獻參る、女中男にもたぶ、院女院などへも參る、

〔萬葉集二十〕二十三日〇天平勝寶八年十一月集於式部少丞大伴宿禰池主之宅飲宴歌

波都由伎（ハツユキ）波知敝（ハチヘ）爾布（ニフ）里之家（リシケ）、故非之久（コヒシク）能於（ノオ）保加（ホカ）流和（ルワ）禮波（レハ）、美都都（ミツツ）之努（シヌ）波牟（バム）、